２．中元節についての発表要旨

台湾の中元節

野村伸一

台湾では旧暦七月一日に地蔵王の管理する地獄の門戸が開き（開鬼門）、同 30 日に閉ざされる。そして 15 日は中元節といい、この前後に*1 寺廟では普度を中心とした儀礼がおこなわれる。７月 15 日は中元地官大帝の誕生日で、廟では孤魂野鬼（好兄弟、普度公、門口公）のための供養が、また仏寺では盂蘭盆の行事が盛大におこなわれる。さらに個々のイエでも孤魂をもてなし一家の安泰を祈願する*2。台湾では 7 月は餓鬼供養の月と考え外出、遠出をひかえる。

中元節は毎年の行事で、日本人による研究や報告もすでにある*3。基本的にはどこのものも同様だが、担い手が異なると、いくらか内容も違ってくる。以下は 1997 年８月 15 日（旧暦７月 13 日）の夜から 17 日の昼過ぎまでおこなわれた中元節の事例である。

祭場

国際空港の近く桃園県大園郷大園村の仁寿宮は感天大帝許真人*4 をまつる古廟で毎年旧暦の７月に中元節をおこなう。祭儀の核心部分は 13 日からの三日ほどであるが、実際には１日の「開幽門」からはじまり 30 日の「閉幽門」まで、つまり一ヶ月がこの法事の期間となる。大園村は六つの小村から成り、毎年交代で祭儀を担当する。今年は内海村が担当した。

儀礼次第

この儀礼は台北に住む許淵通司公（1934 年生まれ）が担当し、さらに三人ほどの者が加わった。かれらは 13 日の夜から二拍三日のあいだ、仁寿宮に寝泊まりして儀礼をおこなう。普度は一般に、「午夜「一天」「二天」などの区別があるが、今回のものは二天に相当する。許淵通氏は自宅に仏壇を設け「釈教振徳壇」を名のる一方で「振福堂択日館」も名のり、占いや祈祷もする。実際の儀礼をみると、仏教と道教の融合した方式であった。祖先は漳州から渡ってきて五代目、父親もこの仕事をしていた。

科儀表（式次第）は仏教、道教の用語で細分され、数えると 50 余りにもなるが、基本構造として主要なものだけを取り上げれば、次のようになる。なお日付はいずれも旧暦。

13 日の午後、廟前に燈・を立てる。灯りはまだともさない。深夜、祭壇を飾り付ける。

１．天界の神々に行事を知らせること

14 日午前１時過ぎ　起鼓鳴金

すぐに廟の前に出て灯りをともし、孤魂に対して普度の挙行を知らせる。

14 日午前２時少し前　発表上章

30 分ほどで終了、仮眠。

２．神仏の来臨を仰ぐこと

14 日午前７時半　　啓請諸仏　奉請三界

３．孤魂野鬼、神がみがよりくるようにと旛を立てること

14 日午前８時過ぎ　監列神旛

４．仏事。終日、経文を連続して十巻分、長々と読み上げる。この間に神がみの昼食、夕刻には孤魂野鬼を招くべく行列をなして水辺にいき灯篭を浮かべる。

14 日午前９時過ぎ　梁皇開巻　一巻歓喜宮以下経文読み

14 日午後７時過ぎ　燃放水燈（水府の孤魂迎え）の準備、パレードがあり、そののちバスで水辺に移動。水辺で孤魂を引請し、廟に戻り廟内に設けた同帰所、寒林所に奉安する。そして供える。

５．神仏や餓鬼に菜飯湯を献上すること、台上に茶碗、箸、酒も用意。許淵通司公の踏み鎮めの動作が特異。

１５日午前９時少し前　金山拝疏　外教供養（土地公供養）六神献飯　叩謝三界

天厨妙供

６．夕刻に神がみを送り返し（神聖帰宮）、そののちに餓鬼に向かい説教をし、これをも送り返す。普度。

１５日午後８時過ぎ　満筵浄孤（廟の近くの孤棚にいき孤魂讃を唱えて祈祷）　燄口普度（読経、手印など）　施食雑類　無主孤魂

７．居残る神霊、仏を送ること

１５日午後１０時過ぎ　勅符平安　奉送諸仏

特徴ー演戯という視点から

身寄りのない霊魂に対するもてなしが手厚い。水燈はかつては各戸で手作りのものを準備し、一家の主が代表して水辺まで持参した。そして廟内には学問をして死んだ霊魂、無学の霊魂たちがきて沐浴し食べていくようにと、水桶や飲食物が用意される。司公はこれらの供養を読経と具体的な振りで演じる。同時に 15 日の夕刻には家々でその入り口に膳を用意し、餓鬼を迎えもてなす。またムラ人の有志は 600 キロを越える巨大な豚を奉納する。

こうした供養が今日なお全島多くの廟でおこなわれる。餓鬼供養の一方では、あそ

びの空間が準備される。廟前の建物の二階では地方劇団が三日間、大衆劇を演じる。奉納芸なので観客用の席はない。かれらは廟内で餓鬼供養がおこなわれていても、かまわずに芝居をつづける。観客はほとんどいない。一方、巨大な豚の奉納がムラ人たちのあそびともなっていて、地区ごとに準備した豚の顔がたくみに飾り付けされ、路上に並べられる。また 14 日の夜、廟から 3 キロほどの水辺に灯篭を浮かべにいく直前、桃園村の路上は仮装した男女、八家将、曲技をする者たちの行進でにぎわう。かれらは孤魂野鬼の悪さを鎮めると同時に、みずからがそれと似たようなモノである。これらとムラ人たちは一体となってひとときをすごす。それは爆竹や花火、各種の音楽で盛り上げられたあそびの空間でもある。

考察

中元節での孤魂野鬼に対する供養の際、人形戯や芝居がおこなわれるが、それは元来は孤魂野鬼そのものの出現であったかもしれない。福建の莆田地区では目蓮戯が頻繁におこなわれたが、これは複雑かしなものとなってさまざまな物語が付加されたが、要するに、女人、特に母親の霊魂を救済してみせる演戯である。

７月中元の孤魂野鬼の救済は芝居のかたちをとらなくとも、なおかなり芸能的に演じられている。福建仙游地区では「九蓮」のもとで霊魂が救済されることを動的に演じる。

朝鮮では 7 月十五日は百中といい密陽百中ノリのなかでは多彩なモノたちの舞踊がみられる。台湾では、ムラ人たちは踊らなくなったが、かわりに芸能者らが踊りまた人形をして踊らせる。この差はそれぞれの地域のムラの歴史によるのだろうが、根本的な差ではない。孤魂野鬼をもてなすところに芸能のひとつの原点があったということを告げている。

餓鬼供養の目的はイエやムラ全体の安寧であったが、それは基底のところにあった霊魂観の反映であろう。この根柢の霊魂観から一体どのような身体演戯がいつ、どのようにして生み出されていったのかという問題は芸能研究の本質的な課題として残されている*1。

福建省仙游の中元節

福建省の中部莆田・仙游地区は宋代以来、独特の演戯文化が発展し、今日なお 100 を超える。地方劇団のが存在して、さまざまな折りに地方劇を演じている。特に。目蓮戯は、古く宋の時代からからおこなわれていたといわれるが、その具体的な、発展の形は、まだ 10 分研究され尽くしていないようである*1。

こうしたなか、2001 年、9 月 1 日から 8 日まで、莆田、仙游地区の中元節の儀礼を中心に調査を試みた。この地区では今日も、各種の寺廟で孤魂野鬼の供養が盛んにおこなわれている。典型的なのは、かつての興化府（莆田地区の旧称）の城隍廟の儀礼で、

ここでは目蓮戯の奉納が今なお、みられる*2。
　以下では、旧暦 7 月 19 日-20 日（9 月 6 日-7 日）に仙游大済鎮鍾峰村仙源祠でおこなわれた祈安醮の事例を報告する。この 2 日間にわたり儀礼は、儀礼の内容は、現地に行く前に、聞いていた内容とはかなり違っていた、すなわち事前の情報では、これは莆田、仙游地区に濃厚な分布を示す三一教の教主林兆恩*3 の誕生日を記念する行事であり、そのなかで非常死を遂げた者たちの亡魂をも供養するものということであった。
　ところが、実際に見た儀礼の内容はそもそも三一教教主の誕生祝いの儀礼とはあまり関係がない。それは典型的な、孤魂野鬼の供養であった。しかも仙源祠（公的には仙源書院）という名は、18 年前に建物を改築したときに、前面に押し出したにすぎず、もともとは五帝廟であった。五帝は福建省でもそれほど広くみられる神ではなく、いわば地方神である。その本質は瘟神で孤魂野鬼の活動と密接な関係がある。
　2 日間の儀礼を司るのは、三一教の経師であり、中心になる者を主壇とよぶ。主壇のほかに、3 人から 5 人の経師が加わる。今回特に注目されたのは主壇の他の者たちが、主に女性であったことである。かつてはもちろん、女性の経師はいなかった。今日、男のなり手が少ないということで、この地区では女性が、代わりに参与している。おそらく今後この、傾向はより進むであろう。

　祭場

　現在の建物は、中央に三一教の教主とそれにちなむ人物をまつり、壁をはさんで左側に五帝、また同じく壁をはさんで右側に観音をまつる。そして、形式的には、すべての儀礼は三一教の教主の前でおこなわれる。

　儀礼次第

　　5.起鼓　6.請神　7.四尼経　8.発使　9.三官　10.経訓　11.経纂　12.十二光　13.祭塔　14.転蔵　15.召魂　16.参礼　17.安位　18.胎骨経　19.金剛経　20.教主誕　21.地官誕　22.中元懺　23.弥陀　24.普門　25.地蔵十業　26.十供　27.東嶽　28.消災　29.北斗　30.普施　31.九蓮　32.供霊　33.祭夫　34.給牒　35.化喬　36.円科　37.拝聖　38.送聖

　特徴のある儀礼

　Ⅰ　9.祭塔　10.転蔵　（以上仏教儀礼）

　転蔵　　祭塔では塔にえがかれた神がみを開光し、真に生きたものとする。それは

転蔵の前提である。これは、3 メートルほどの模造の塔を作り、そこに血の池地獄から極楽世界までの 7 つの段階の世界を表現する。そして、血の池地獄にあって苦しむ男女の替身（霊魂を象徴する人形）を救い上げて徐々に極楽世界へとのぼらせていく。素焼の壺で冥府を象り、それぞれの塔のもとで主壇が錫杖をもってこれを壊す。いわゆる打城の表現。なお塔の下には十二の小皿*1 が置かれていて、これも錫杖で破壊される。最後に塔は焼却する。それはいわば独特の霊魂救済劇である。

Ⅱ　26.普施（仏教儀礼）　27.九蓮（道教・仏教儀礼、三一教の特徴なのか）

九蓮　　普施では地蔵の力で不特定の孤魂を地獄から解放し、食を施す。九蓮は九蓮灯ともいう。廟内から経師と祈願者、ムラ人らが列をなして庭に出てくる。そして経師らは庭に置かれた 13 の食卓のあいだを幾度も複雑に巡りながら、霊魂の済度を具体化する。下品下からはじまって上品上までの九段階が確認される。九蓮は最後の盛り上がり。約 2 時間。

済度の対象について

孤魂野鬼のなかでも不慮の死を遂げた業魂と十分に救われない亡魂の別がある。亡魂は今生の人に関連を持ちつづけ、そのために今生の人が病、災難に遭う。今回はこの亡魂供養が中心となった。そのひとつは前生の妻で、このために今生の男性が癌にかかって闘病をしている。そこで、その妻が祭場にきて真摯に供養儀礼に参加した。要するに不特定の霊魂のなかでも特に家族とかかわりのある霊魂を想定して、その名前*2 まで書き記して供養する。これはより具体的に弔いをしようとすることの表れであろう。

普度という儀礼の場で近親者の霊魂を救済しようとするのは莆田仙游地区の伝統のようで、これと似たものを田仲一成氏はシンガポールの「莆田逢甲大普度」の事例に関連して指摘している。

付記　田仲一成『中国の宗族と演劇』、東京大学出版会、1985 年所収の「南洋興僑葬礼祭祀」の章を参照のこと。ここではシンガポールにおける瓊瑶法教（三一教）の儀礼が報告されている、それは莆田、仙游出身の華僑のあいだで 10 年に 1 度、七日間おこなわれる旧暦 7 月の大普度である。そこでは血の池地獄から女性の霊魂を救済する塔懺、戸外でおこなう五方八卦の走り、孤魂に食を施す瑜伽　燄口があり、またそのほか舞台では 3 日間にわたって目蓮戯が演じられる。

なお塔懺は僧によりおこなわれる。

論点

1. 夏に訪れる孤魂の性格、歴史的由来
2. 女性の霊の救済と宗族の規範
3. 中国南部、琉球、朝鮮など各地の様相
4. 三一教あるいは仏教、道教と巫俗の融合
5. 鈴木満男の批判的指摘と朝鮮、日本の「祖霊観」